

# 土地分類基本調査

小 松

5 万 分 の 1

国 土 調 査

石 川 県

1 9 8 5

## 序 文

本地域は、県都金沢市の隣接地域であり、また、北陸高速自動車国道、小松空港、国鉄北陸本線を有し、石川県の第二の玄関とも言える地域で、今後についても、先端産業の導入や北陸新幹線計画などにより、なお一層の発展が期待されているところです。

本調査は、国土調査法（昭和26年法律第180号）に基づき、適正な土地利用、環境保全のために必要不可欠な要素である地形・表層地質・土壌など土地に関する自然的特性を科学的かつ総合的に把握し、健康で文化的な生活環境の確保を図ることを目的として実施されるものであります。

本年度は、「小松」図幅の成果をとりまとめたわけですが、この成果が、行政面はもとより、広く県民の皆さんに利用されることを希望する次第であります。

最後に、本調査に御協力いただきました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

昭和60年 3 月

石川県農林水産部長

國 廣 安 彦

## ま え が き

- 1 本調査は、土地分類基本調査関係の各作業規程準則（総理府令）に基づいて作成した「石川県都道府県土地分類基本調査作業規程」により実施したものである。
- 2 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿である。
- 3 調査基図は、測量法第27条第2項の規定により、建設大臣の刊行した5万分の1地形図を使用したものである。
- 4 調査の実施、成果の作成関係機関及び担当者は、下記のとおりである。

---

指導・調整 国土庁土地局国土調査課

総括	石川県農林水産部耕地整備課	課長	梅田 武夫
		課参事兼 課長補佐	浜 辺 吉 則
		課長補佐	羽 村 昭
		換地係長	田 村 岑 実
		主 事	山 本 朗

---

地形分類調査	金沢大学理学部	助 教 授	山 田 一 雄
--------	---------	-------	---------

---

表層地質調査	金沢大学理学部	教 授	粕 野 義 夫
--------	---------	-----	---------

---



# 目 次

## 位 置 図

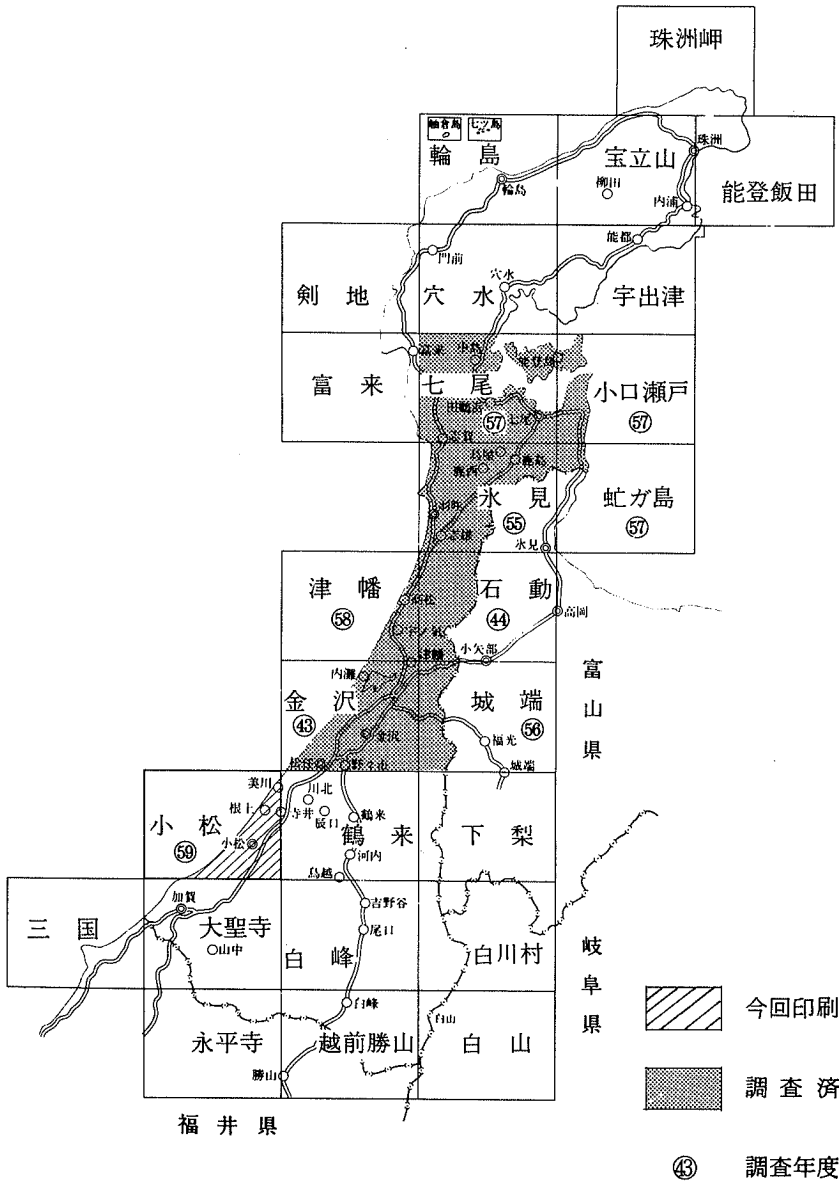
## 総 論

I 位置・行政区画および面積 .....	1
II 人口および世帯数 .....	3
III 地域の特性 .....	5
1 自然的条件 .....	5
2 社会経済的条件 .....	8
3 就業構造 .....	10
IV 主要産業の概要 .....	12
1 農 業 .....	12
2 工 業 .....	14
3 商 業 .....	16

## 各 論

I 地形分類図 .....	19
II 表層地質図 .....	24
III 土 壌 図 .....	29
IV 土地利用現況図 .....	40

# 位置図



# 総論

# I 位置・行政区画および面積

## 1 位置

「小松」図幅は、石川県の西北部に位置し、東経  $136^{\circ} 15' \sim 136^{\circ} 30'$  北緯  $36^{\circ} 20' \sim 36^{\circ} 30'$  の範囲である。

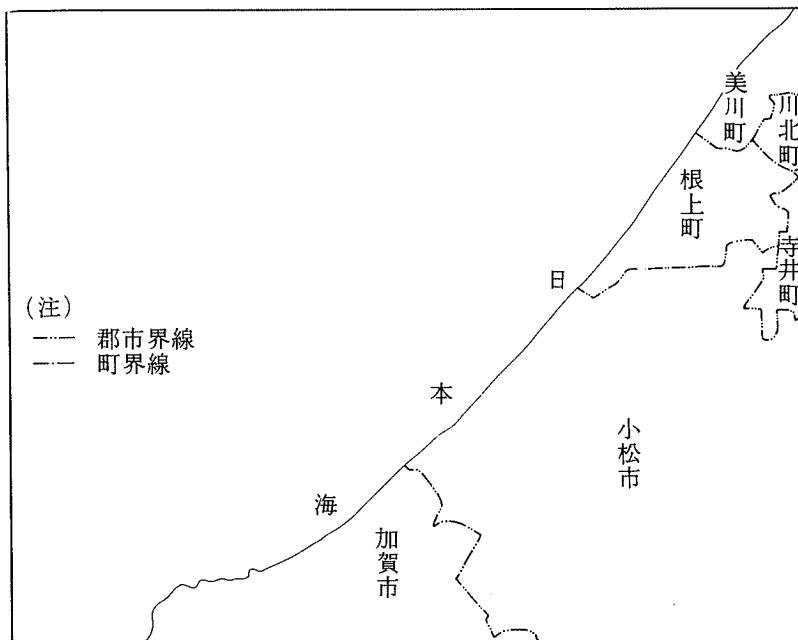
## 2 行政区画

当該図幅内の行政区画は、小松市、加賀市、根上町、寺井町、川北町、美川町の2市4町である。（第1図参照）

## 3 面積

本調査の対象面積は、約150㎏であり、その市町村別内訳及び占有率は、第1表のとおりである。

第1図 行政区画





第1表 図幅内市町別面積

区分 市町名	図幅内面積		市町全面積 B ( <i>km</i> <sup>2</sup> )	占有率 A / B (%)
	面積 A ( <i>km</i> <sup>2</sup> )	構成 (%)		
小松市	96.19	64.2	374.72	25.7
加賀市	28.22	18.8	152.03	18.6
根上町	13.74	9.2	13.74	100.0
寺井町	3.90	2.6	13.31	29.3
川北町	2.17	1.5	15.10	14.4
美川町	5.50	3.7	9.67	56.9
計	149.72	100.0	578.57	25.9

資料：建設省国土地理院「昭和59年全国都道府県市区町村別面積調」（昭和59年10月1日現在）による。

ただし、図幅内面積は、石川県農林水産部耕地整備課調査による。

## Ⅱ 人口および世帯数

本調査地域内市町における人口および世帯数は、213,328人、57,401世帯（昭和55年国勢調査）であり、どちらもほぼ県全体の2割程度である。また、第2表にみるとおり、昭和50年調査と比較すると、人口伸び率、世帯数伸び率ともに若干県全体の伸び率を下回っている。各市町別に県全体と比べると、加賀市と寺井町では人口伸び率、世帯数伸び率ともほぼ同じであるが、他の小松市、根上町、川北町、美川町ではどちらも下回った数字を示している。

第2表 人口および世帯数

区分 市町名	昭和50年				昭和55年				増減				人口伸び率 B/A	世帯伸び率 b/a	
	人		口		世帯数		世帯数		人		口				世帯数
	男	女	計(A)	世帯数(a)	男	女	計(B)	世帯数(b)	男	女	計	世帯数			
															男
小松市	48,654	51,619	100,273	25,471	50,821	53,508	104,329	27,416	2,167	1,889	4,056	1,945	1.04	1.08	
加賀市	28,793	32,806	61,599	17,109	30,395	34,887	65,282	18,985	1,602	2,081	3,683	1,876	1.06	1.11	
根上町	6,614	7,051	13,665	3,344	6,895	7,246	14,141	3,586	281	195	476	242	1.03	1.07	
寺井町	6,088	6,395	12,483	2,948	6,403	6,700	13,103	3,259	315	305	620	311	1.05	1.11	
川北町	2,024	2,243	4,267	917	2,018	2,238	4,256	945	△ 6	△ 5	△ 11	28	1.00	1.03	
美川町	5,823	6,232	12,055	3,042	5,932	6,285	12,217	3,210	109	53	162	168	1.01	1.06	
図幅内 地域計	97,996	106,346	204,342	52,831	102,464	110,864	213,328	57,401	4,468	4,518	8,986	4,570	1.04	1.09	
県計	518,594	551,278	1,069,872	290,183	542,782	576,522	1,119,304	322,071	24,188	25,244	49,432	31,888	1.05	1.11	

資料：昭和50年国勢調査

昭和55年国勢調査による。

## Ⅲ 地域 の 特 性

### 1 自然的条件

#### (1) 地 勢

本地域は、石川県の根幹部に位置し、大別して、能美・江沼丘陵と加賀低地に分類できる。

本図幅東南部を占める能美・江沼丘陵は、ほぼ全域にわたって、砂礫を主とする更新世中期の未固結堆積物によっておおわれており、図幅内においては海拔高度100 m以下で、なだらかな丘陵地である。

加賀低地は、手取川扇状地、小松・江沼平野と一部の台地、沿岸砂丘によって構成されている。手取川扇状地は、加賀低地の中央部を占め、本図幅では北部に現れる。本図幅の大部分を占める小松・江沼平野は、瀧埋積平野であり、その名残りは加賀三湖（今江潟、木場潟、柴山潟）として存在したが、近年の干拓事業によって著しい変貌をとげ、湛水域は狭められてしまった。台地では、加賀市南部の橋立台地と粟津周辺の月津台地がみられ、海岸線では、石川県を特徴づける地形上の单元である沿岸砂丘が走っている。

参考資料：石川県の自然環境（第1分冊地形地質）1977年

#### (2) 気 象

当該地域における昭和58年の気象概況は、第3表にみるとおりであるが、年平均気温14.0℃、年間降水量2,432 mm、最深積雪量40 cmと、平年よりも降水量が多めであった。また、この地域は、県内の他地域に比べ、年平均気温が高く、年間降水量、積雪量とも少なめで、本県の中では温和な気候に属している。

第3表 気象表(1983年)

月 区分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
平均気温 °C	3.7	2.3	6.2	14.4	17.1	19.9	23.5	26.7	23.1	15.5	10.3	5.0	14.0
最高気温 °C	7.2	5.3	10.3	19.6	21.7	23.9	26.7	30.3	26.7	20.1	14.6	8.4	30.3
最低気温 °C	0.5	- 0.5	2.4	9.2	12.1	16.0	20.8	23.4	19.8	11.2	5.9	1.9	- 0.5
降水量 mm	180	204	174	183	131	116	392	46	371	158	256	221	2,432
積雪量 cm	40	38	9	-	-	-	-	-	-	-	-	2	40

観測所番号 56276

小松市今江町7-120

小松気象観測所

N 36° 22.7'

E 136° 26.3'

H 3 m

資料：1983「石川県気象年報」

### (3) 動物・植生

#### イ 動物

当該地域は、海岸・砂丘地帯、平野部・潟地域、丘陵地帯と変化に富んでおり、動物相も比較的豊かである。

哺乳類としては、地形的に標高100m以下の地域であることから、大型哺乳類の生息は図幅内においては見られない。中小型哺乳類としては、丘陵地帯でタヌキ、テン、キツネ、アナグマ等が、また図幅内全体ではイタチ、ムササビ、ノウサギ、ネズミ類が広く生息している。

鳥類としては、海岸線及び砂丘地帯が滞留採餌、通過経路になっていることから、ウ、カモメ、シギ、チドリ類の繁殖、生息がみられる。平野部、潟地域は冬鳥の渡来地として重要で、ガン、カモ類が多い。また、丘陵地帯はその地形上から、一般的な野鳥の殆んどが生息していることが予想される。

参考資料：加賀南西部地域自然環境調査報告書（昭和53年3月）

#### ロ 植生

本地域は、潜在植生的にはヤブツバキクラス域であるが、その殆んどが二次林、代償植生等に置き換えられており、その特徴から丘陵地帯、平野部、潟地域、海岸線及び砂丘地帯に分類できる。

丘陵地帯は、コナラ、アカマツ等が主体であるが、スギ、モウソウダケの植林地も多い。

平野部では、先に述べた自然保護上重要なヤブツバキクラス域潜在植生である社叢林が各所に点在している。

木場潟、柴山潟などの潟地域は、その周辺がヨシ群落等で覆われているが、柴山潟などは最近の干拓事業等により、その自然環境が大きく変貌してきている。

海岸線では、ハマゴウ、ハマエンドウ、ハマヒルガオ、コウボウムギ等の海浜植物群落が生育しており、その内陸側の砂丘地帯では、クロマ

ツ、ニセアカシアなどの保安林が植林されている。

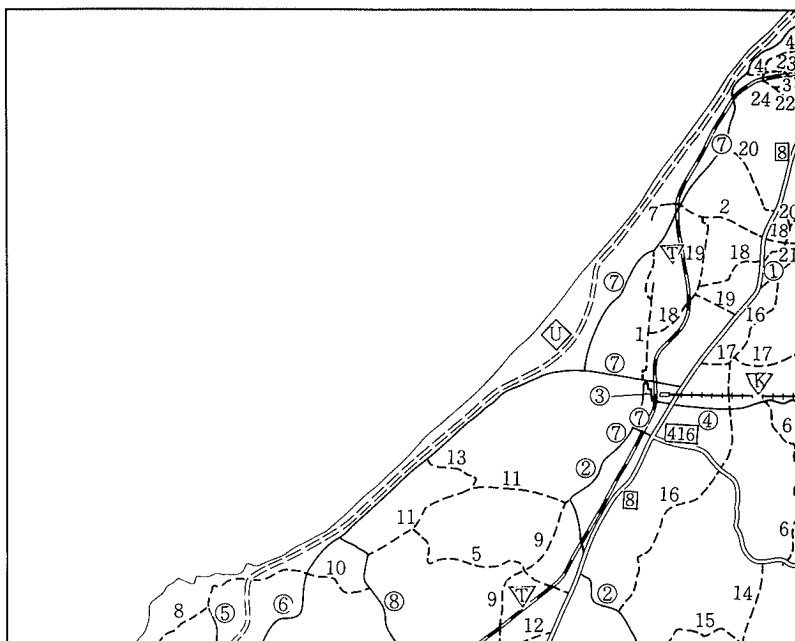
参考資料：加賀南西部地域自然環境調査報告書（昭和53年3月）

## 2 社会経済的条件

当該地域は、小松空港、北陸高速自動車国道、国鉄北陸本線などにより、石川県の窓口とも言える地域であり、また、県下における工業先進地としても、温泉などによる観光地としても非常に重要な地域である。さらには、北陸新幹線計画や先端産業導入などを含め、今後様々な開発、発展が予想される地域でもある。

鉄道は、国鉄北陸本線が金沢・富山－福井間を結んでおり、また、北陸鉄道小松線が小松－遊泉寺間を走っている。道路は、高速道路として北陸高速自動車国道が海岸沿いに、国道として金沢・富山－福井間を8号、小松－勝山間を416号が、主要地方道として小松－鶴来線、小松－山中線、小松停車場線、小松－下吉野線、橋立港線、小松－加賀線、金沢－美川－小松線、山中－伊切線が、一般県道として小松－根上線、根上－寺井線、鶴来－水島－美川線、松任－美川線、新保－矢田野線、大野－八幡線、寺井停車場線、深田－片野－下福田線、串－加賀線、小塩－潮津線、潮津－串線、高塚－粟津線、日末－村松線、大杉－長谷線、瀬領－粟津線、津波倉－寺井線、鍋谷－和気－小松線、粟生－小松線、西二口－長田線、吉原－寺井線、和気－寺井線、草深－木呂場－美川線、道法寺－源兵島－美川線、中町－美川停車場線が走っている。また、小松空港は、国内便（東京、札幌、仙台、福岡）だけでなく、国際便（韓国）も就航しており、今後の国際化時代に多いに期待されている。

第2図 道路図



国	鉄	▽	北陸本線	7	寺井停車場線
地方	鉄	▽	北陸鉄道小松線	8	深田片野下福田線
道	道	U	北陸高速自動車国道	9	串加賀線
国	道	8	一般国道8号	10	小塩潮津線
		416	一般国道416号	11	潮津串線
県	道	①	小松鶴来線	12	高塚栗津線
(主要地方道)		②	小松山中線	13	日末村松線
		③	小松停車場線	14	大杉長谷線
		④	小松下吉野線	15	瀬領栗津線
		⑤	橋立港線	16	津波倉寺井線
		⑥	小松加賀線	17	鍋谷和気小松線
		⑦	金沢美川小松線	18	粟生小松線
		⑧	山中伊切線	19	西二口長田線
(一般県道)		1	小松根上線	20	吉原寺井線
		2	根上寺井線	21	和気寺井線
		3	鶴来水島美川線	22	草深木呂場美川線
		4	松任美川線	23	道法寺源兵島美川線
		5	新保矢田野線	24	中町美川停車場線
		6	大野八幡線		



### 3 就業構造

図幅内市町の昭和55年における就業人口は、111,165人であり、第三次産業56,562人（50.9%）、第二次産業46,483人（41.8%）、第一次産業8,077人（7.3%）の順で構成されている。構造の特徴としては、第4表にみるとおり、県全体に比べ第二次産業の構成比が高いことが挙げられる。これは、この地域において、一般機械、繊維工業等の製造業が盛んであることがその理由である。

各市町別にみると、加賀市を除く1市4町で第二次産業の構成比が高く、川北町では第一次産業（農業）の構成比も高い。また、加賀市については、第三次産業の構成比が高いが、その原因として、当市が温泉等の観光資源に恵まれており、それに付随するサービス業等の就業者が多いことが考えられる。

第4表 産業別就業人口（満15歳以上）

区分 市町名	第一次産業				第二次産業				第三次産業				構成比%			備考
	農業	林業	水産業	計	鉱業	建設業	製造業	計	小売業 卸売業	サービス業	その他	計	第一次	第二次	第三次	
小松市	3,236	77	37	3,350	36	3,968	19,472	23,476	10,191	9,508	6,619	26,318	6.3	44.2	49.5	
加賀市	3,008	25	218	3,251	5	2,349	9,510	11,864	6,520	10,695	3,195	20,410	9.1	33.4	57.4	
根上町	389	-	4	393	8	533	3,529	4,070	1,053	936	815	2,804	5.4	56.0	38.6	
寺井町	371	3	-	374	11	496	2,712	3,219	1,471	1,013	705	3,189	5.5	47.4	47.0	
川北町	460	-	-	460	22	223	641	886	253	356	294	903	20.4	39.4	40.1	
美川町	228	3	18	249	9	483	2,476	2,968	1,193	888	857	2,938	4.0	48.2	47.7	
計	111,165	7,692	108	8,077	91	8,052	38,340	46,483	20,681	23,396	12,485	56,562	7.3	41.8	50.9	
県計	567,684	54,803	1,350	62,602	394	53,025	140,248	193,667	123,171	113,322	74,676	311,169	11.0	34.1	54.8	

1) 「分類不能」の産業を含む。

資料：「昭和55年国勢調査」による。

## IV 主要産業の概要

### 1 農 業

本地域内市町の農業の概要は、第5表のとおりであるが、専業割合4.2%、田割合91.4%と、本県農業の特徴である稲作・兼業農家の傾向が一段と進行している地域であると言える。これは、この地域が県下における工業先進地であること及び交通手段等の発達により県都金沢市を含む経済圏への通勤が容易になっていること、並びに本地域内において大規模なほ場整備などの土地改良事業が行われていることなどによるものと考えられる。

第5表 農業の概要

区分 市町名	農家戸数(戸)			耕地面積(ha)			田割合 (%)
	専業	兼業	合計	田	畑	合計	
小松市	248	4,517	4,765	4,210	433	4,640	90.7
加賀市	105	2,561	2,666	3,350	442	3,800	88.2
根上町	25	802	827	656	30	686	95.6
寺井町	12	682	694	662	12	674	98.2
川北町	19	655	674	863	13	876	98.5
美川町	10	312	322	352	10	362	97.2
計	419	9,529	9,948	10,093	940	11,038	91.4
県計	2,839	59,259	62,098	45,300	10,200	55,500	81.6

資料：昭和57～58年「石川農林水産統計年報」による。

(注) 農家戸数は、1980「農林業センサス」による。

耕地面積は、ラウンドされた数値を使用しているため、各数値の積上げ値と合計とが一致しない場合がある。

## 2 工 業

地域内市町における工業の概要は、第6表のとおり、事業所数4,307ヶ所、従業員数37,756人、製造品出荷額53,281,892万円であり、いずれも県全体の3割程度を占めている。主工業としては、一般機械、繊維工業などの製造業が盛んで、特に一般機械製造業の比重が高い。また、小松市は、県都金沢市に次ぐ工業地であり、地域内だけでなく、県全体においても重要な位置にある。

市町別にみた場合、川北町を除く2市3町で一般機械、繊維工業の製造業が比重を占め、川北町では窯業・土石、石油・石炭製品製造業などが中心である。

第6表 工業の概要

区分	事業所数 (ヶ所)	従業者数 (人)				製造品出荷額 (万円)	
		従業者		家族従業者			計
		常用労働者		男	女		
		男	女				
市町名							
小松市	2,378	8,787	5,920	2,057	1,785	29,142,159	
加賀市	930	4,368	2,869	770	725	10,294,151	
根上町	395	2,625	1,553	322	257	6,700,492	
寺井町	372	858	761	341	262	2,221,341	
川北町	65	357	263	38	34	1,101,162	
美川町	167	1,723	918	113	50	3,822,587	
計	4,307	18,718	12,284	3,641	3,113	53,281,892	
県計	15,009	57,997	51,177	12,171	9,303	154,222,462	

資料：昭和58年「工業統計」による。

(注) 製造品出荷額には、加工賃収入額、修理料を含む。

### 3 商 業

地域内市町における商業の概要は、第7表のとおり、商店数4,379店、従業者数17,258人、年間商品販売額41,404,898万円で、県計との構成比は商店数18.8%、従業者数16.2%、年間商品販売額10.4%となっている。地域内では、小松市及び加賀市でその数字の大半が占められており、小松市は県都金沢市に次ぐ数字（その較差は大きい）を示している。また、小松市、加賀市では、各種商品小売業、百貨店も幾つかみられる。

第7表 商業の概要

区分 市町名	卸・小売業計			卸売業			小売業					
	商店数		従業者数		年間商品販売額		商店数		従業者数		年間商品販売額	
	実数	構成比 (原計 100)	実数	構成比 (原計 100)	実数	構成比 (原計 100)	商店数	従業者数	年間商品販売額	商店数	従業者数	年間商品販売額
小松市	2,216	9.5	9,024	8.5	26,469,841	6.7	454	3,028	16,458,799	1,762	5,996	10,011,042
加賀市	1,323	5.7	5,289	5.0	9,377,541	2.4	189	1,332	3,878,629	1,134	3,957	5,498,912
根上町	222	1.0	798	0.8	1,401,074	0.4	27	171	516,829	195	627	884,245
寺井町	331	1.4	1,272	1.2	2,639,041	0.7	105	541	1,651,793	226	731	987,248
川北町	47	0.2	136	0.1	169,405	0.0	3	10	7,072	44	126	162,333
美川町	240	1.0	739	0.7	1,347,996	0.3	24	108	633,983	216	631	714,013
計	4,379	18.8	17,258	16.2	41,404,898	10.4	802	5,190	23,147,105	3,577	12,068	18,257,793
県計	23,338	100.0	106,817	100.0	398,926,049	100.0	4,856	42,105	303,800,871	18,482	64,712	95,125,178

資料：昭和57年「商業統計」による。



# 各 論

# I 地形分類図

## 1 地形概説

5万分の1図幅「小松」の陸域は、丘陵地、台地および低地からなり、そのうち低地が面積の約70%を占める。

本図幅域の丘陵地は、石川県南部に広く発達する加賀山地の、北西縁をふちどる丘陵地（能美丘陵）の一部にあたるもので、図幅東南部を占めるほか、西南部の橋立台地の一部にもみられる。これら丘陵地の西方ないし北方には、更新世後期とみられる海成段丘からなる台地が発達する。低地では三角州性平野が最も広く、北部には石川県下最大の河川手取川による扇状地（の一部）、海岸に沿っては海岸砂丘の発達がみられる。図幅南部の低地域には、加賀三湖と称された柴山潟、今江潟、木場潟がかって存在したが、近年の干拓により、柴山潟の北半部と今江潟が消失した。

本図内の河川としては、手取川の河口部が最北部にあり、熊田川、西川が小支流としてこれに注いでいる。梯川は、東南隅域を大杉谷川として北流して隣接図域に一たん入り、図幅中央部に再び現われて西流する。これに八丁川と鍋谷川とが北から合流する。粟津川は木場潟に流入し、同潟からは前川となって流出し安宅附近で梯川に合流している。以上の河川はいずれも1級河川である。2級河川としては、柴山潟に注ぐ動橋川と八日市川、同潟と日本海を結ぶ人工の新掘川、および橋立台地を刻む田尻川がある。これらの河川、とくに手取川、梯川、動橋川などは古来しばしば大規模な氾濫をおこしてきた。

## 2 地形各説

### (1) 丘陵地

本図内の丘陵地は、その高度分布（ないし起伏量）と構成地質のちがいにより二分でき、それぞれを大起伏丘陵地および小起伏丘陵地とする。前者は地域東南隅すなわち大杉谷川以東にだけ分布がみられるもので、海拔

高度の最高は140 m、起伏量はおおむね100 m以上、構成する地質は中新世の火砕岩類である。これに対しその他の丘陵地は、いずれも高度100 m未滿の小起伏丘陵地であり、かつ中新世火砕岩を基盤として、それを不整合に覆う更新世中期の未固結堆積物（砂、礫、泥岩）の被覆により特徴づけられる。ただし、その厚さが比較的うすく（20～30 m未滿がふつう）、また開析がよく進んでいて平坦面の残存度も大きくないので、更新世堆積物の保存は、特に標高数10 m以上では山稜部にほぼ限られる。大小両起伏地を通じて斜面の傾斜は15～30°部が非常に卓越する。

## (2) 台地

図幅域の台地は、地域的に四つに大別される。即ち、東南部の丘陵地をふちどって八幡から津波倉にかけて巾せまく分布するもの（八幡台地と仮称する）、木場潟と旧柴山潟（現干拓地）にはさまれて分布する月津台地、柴山潟北方の柴山台地、柴山潟西方に広く発達する橋立台地である。これらは元来一連の海成段丘であり、更新世後期の形成と推定されるので、ここでは中位段丘として示した。なお橋立台地ではさらに上・下2段の面が識別されるので、中位段丘の上位および下位として細分した。

卓越する段丘面高度は、八幡台地および月津台地で15～5 m、柴山台地で25～20 m、橋立台地では上位面で40～30 m、下位面で30～10 mを示す。旧汀線高度は、八幡台地北部で20 m、八幡台地中部以南から月津台地で15 m、橋立台地の下位面で30 mと判定される。これらの資料は、橋立・柴山台地に対する八幡・月津台地地区の相対的な沈降を示すもので、小松平野の形成に関連あるものと思われる。

月津、柴山両台地にくらべて、八幡、橋立の各台地では台地を刻む浅い谷の発達（広がり）が顕著であり、従って段丘面の残存度は相対的に小さい。ただし面の平坦度には台地間の差はとくに認められない。

月津、柴山、橋立の各中位段丘を構成するものは、中～粗粒砂を主体とする更新世後期の地層であるが、橋立台地の一部には段丘堆積物を欠いて

基盤の新第三系が直接露出している所がある。一方、八幡台地の構成物は、砂層を主とし一部に泥層や礫層を伴うもので、その層相上の特徴から背後の丘陵地に分布する中部更新統と一連のものと思われる。従って八幡台地は、段丘面の形成に対応する堆積物を欠くいわゆる侵食段丘とみなされる。

八幡台地を除く各台地上には、その一部に一般段丘面よりは一段高い、東北－西南の伸びをもつ細長い高まりがみられる。すなわち、月津台地ではその北西縁に沿って今江町から月津町にかけて発達しており、最大巾約600 m、一般段丘面との比高10 m。柴山台地ではその東南部にあり、巾500 m未満で比高15 m。橋立台地では片山津温泉から西南に伸びていて巾500 m、その南側の上位面との比高は20～10 m、北側の下位面との比高は25～15 mに達する。これらはいずれも砂層からなり、しばしばちりめん模様のかまかいラミナが認められる。その形成機構などについては今後の検討を要するが、中位段丘層堆積時の海岸砂丘かと推定される。

### (3) 低地

本分類図では、低地を谷底平野、扇状地、三角州、砂丘、浜に大別して示した。なお、低地としては、干拓地（人工改変地Ⅰ）も本図内に広くみられる。

扇状地は図幅北東部に分布し、これは北東方に広大に発達する手取川扇状地の扇端の一部にあたる。南の三角州平野（小松平野）との境界は漸移的で一線で画しがたいが、およそ5 m等高線を目安とした。本扇状地は砂礫層から構成されている。

三角州平野としては小松平野がある。おおむね海拔5 m以下の低平な潟埋積性あるいは後背湿地とみられる低地である。平野南部には、近年まで今江潟、柴山潟、木場潟の三湖があったが、柴山潟西南部と木場潟を残して干拓された。

谷底平野のうち、台地を刻むものは、巾にくらべて下刻が浅く谷底の堆積物も極めてうすい。

手取川河口部から橋立台地にかけて海岸砂丘がよく発達する（小松砂丘、能美砂丘とも呼ばれる）。梯川以北の砂丘は最大幅 1 km，陸側から海側にかけて一般に内列砂丘，砂丘間凹地，外列砂丘に区別され，高度は内列砂丘の最高で 20 m，外列砂丘のそれで 13 m，全般的には 10 m 未満を示す。なお内・外砂丘の区別が明瞭でない場合もある。梯川以南の砂丘は規模が大きく，小松空港地区で巾 2 km を越える。片山津ゴルフ場付近では凹地をはさんで内，中，外の 3 砂丘列が認められるが，空港地区では内列砂丘を欠く。規模は中列砂丘が圧倒的に大きく，最高はゴルフ場付近で 35 m に達する。

#### (4) その他

本図に於て微高地として図示したもののうち，旧柴山潟と旧今江潟を隔てるものと小松市街地をのせるものとは，いずれも規模が大きく，ともに砂質の地盤からなっている。その起原は恐らくいわゆる縄文海進時に形成された砂州（ないし砂嘴）にあたるものと思われる。その他の小規模な微高地の多くは自然堤防である。

図幅域には人工改変地が広くみられる。干拓地としては既述の柴山潟北東半部と今江潟があり，柴山潟北西岸には小規模な埋立地がある。砂丘地の改変地では小松空港，ついで片山津ゴルフ場が規模が大きく，そのほかでも採砂場や工業団地等用地として随所に改変が進められている。台地の改変地は，水田地の土地改良，宅地造成，採砂によるものが大きく，丘陵地での改変は主として宅地，学校用地造成による。

本域内には地すべり地形，崩かい地形は認められない。

## 主 な 参 考 文 献

藤則雄（1975）：北陸の海岸砂丘。第四紀研究，14-4，195-220。

粕野義夫（編著）（1977）：10万分の1石川県地質図及び同説明書。石川県発行，石川県の自然環境，第1分冊「地形・地質」。

建設省北陸地方建設局北陸技術事務所（監修）（1982）：石川県平野部の地盤図集。（社）北陸建設弘済会発行。

謝辞：地形分類図の作成に際しては，1960年代後半から1970年代初頭にかけて，北陸第四紀研究グループ（筆者もメンバーの1人）により行われた小松一大聖寺地区の第四系についての調査資料（未発表）をも参照した。また北国鑿泉株式会社中川耕二氏からは，小松地区の地下地質について教示を得た。以上の各位に感謝する。

〔山 田 一 雄〕

## Ⅱ 表層地質図

### 1 概 説

#### (1) 地形区分と地質分布

5万分の1「小松」図幅の陸域は、地形的に以下の5単元に区分され(1. 地形分類図の項参照)、表層の地質分布も、ほぼ地形区分に対応している。

##### イ 海岸砂丘

手取川河口部の美川地区から、根上地区、梯川河口部、小松空港地区を経て新堀川南西部にわたり、汀線付近にせまく海浜砂が分布する。

##### ロ 沖積低地

手取川下流部、小松市街地及び周辺と、旧加賀三湖の低地を含む。加賀三湖のうち、小松市街地南西側の旧今江瀉は全面的に干拓され、旧柴山瀉も約2/3が近年干拓された。

##### ハ 台 地

図幅南西部の、橋立台地の一部、柴山台地及び月津台地がこれに相当し、更新世後期～末期の段丘(中位段丘及び低位段丘)堆積物におおわれる。

##### ニ 山麓縁丘陵地

海拔ほぼ90m以下の低い丘陵地で、更新世中期の堆積物によっておおわれる。

##### ホ 丘 陵 地

図幅の東南隅を占める海拔100m未満の丘陵地で、第三紀中新世の火砕岩から成り一部に流紋岩類を含む。

#### (2) 表層地質の区分

小松図幅の全域をカバーする概略の地質図としては、10万分の1地質図(鮎野, 1977)と10万分の1地盤図(石川県地盤図編集委員会, 1982)があるのみで、特定の地層名を付して公刊された文献としては、図幅南西

部の海岸地区に関するもの（鮎野，1968）があげられる。

ここでは、表層地質図の凡例に示したように、下記のように区分して図示した。

完新世の未固結堆積物

砂丘砂（sd）及び海浜砂（bs）

沖積低地 泥質（m），砂質（s），礫質（g）

更新世の未固結堆積物

台地を構成する砂質堆積層（ss）

丘陵縁に分布する砂・泥・礫層（Smg）

第三紀（中新世）の固結堆積岩（SMT）

第三紀（中新世）の火山性岩石

流紋岩質火砕岩（PY）と流紋岩（R）

### (3) 地質断面図と柱状図

海岸砂丘・沖積低地・台地及び丘陵を横切る地質断面図としては、水平縮尺5万分の1，垂直縮尺2万分の1（水平：垂直＝1：2.5）の推定断面図A-A'を図示した。ただし、丘陵部を除く台地・低地・砂丘の下に伏在する第三紀層の深度ならびに性状については、確実な資料にとぼしく、推測の域を出ないものであることに注意されたい。

低地部の地下地質断面については、主として『石川県平野部の地盤図集』（1982）に準拠して、垂直縮尺を50倍にした断面図（B-B'，C-C'，D-D'の3断面）について海面下40mまでの構造を示し、別に凡例を付した。又、①～④の柱状図をえらんで図示したので参照されたい。

## 2 各 説

### (1) 海岸砂丘とその地下構造

海岸砂丘は、主として中粒～粗粒の砂層から成るが、砂丘下の構造は場所によって異なり、下位にある沖積砂層との境界は必ずしも明確ではない。



砂丘部の柱状図の例として、①、④、⑤、⑥、⑧、⑨、⑰、⑱、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔を示したが、下底部近くに円磨された小礫を含む場合や、腐植物を介在することがある。砂丘砂の下底は、海面下5 mくらいの所にあると考えられ、N値は15～20以上あるのが普通である。

## (2) 沖積低地の地下構造

表層地質図では、表層部約30 mを構成する堆積物が礫質に富む場合(柱状図③、⑪、⑬など)を礫質として区分し、手取川下流域がこれに相当する。小松市街地及びその周辺(柱状図⑮、⑲、⑳、㉑、㉒など)の、表層部が砂質に富む場合を砂質とし、木場潟周辺(柱状図㉓、㉔など)のように厚い泥質層から成る場合を泥質とした。従って、礫質・砂質・泥質の区分は便宜的なものであることに留意されたい。

沖積低地の地下構造は、断面図B-B'、C-C'、D-D'によってよりよく表現されている。断面B-B'にみられるように、手取川に近い北部では沖積層がうすいが、八丁川以南の小松市街地では厚さ25 m前後となり、沖積層の下半部には、厚さ7～12 mの軟弱な泥質層(Ac1)が広く分布する。断面C-C'の旧今江潟や、断面D-D'の柴山潟の地下では、軟弱な泥質層はさらに厚く、20 mをこえる所もある。この軟弱泥層のN値は一般に5以下で、2～3の場合も少なくない。

沖積層の下位に伏在する砂礫質層(Dg1)は、更新世末期の堆積物で、沖積低地下の支持層を成し、粘土質層(Dc1)や砂質層(Ds1)を伴うことがある。これらの地層は、図幅内では地表分布は認められないが、北接する手取扇状地の下に広く伏在するものに相当する。

## (3) 台地及び丘陵縁の堆積物

橋立・柴山・月津の台地を構成するものは、更新世後期の海面上昇期に形成された堆積物である。その大部分は中粒～粗粒の砂層(ss)から成るが、片山津など一部の区域では、砂層の下位に、泥層及び礫層から成る地層(Smg)を伴っている。月津台地の北方への延長は、小松市街地の地下に

伏在するものと考えられる。

丘陵縁部に分布する堆積物は、主として砂層から成り、一部に泥層や礫層を伴うもので、北部の八幡・吉竹地区などでは、瓦土の原土として採取されているものがその一部である。

(4) 中新世の固結堆積岩 ( SMT )

中新世の固結堆積岩は、木場潟東側の一部、片山津の南端、及び海岸部の小範囲などに露出している。木場潟東側の三谷町付近では、砂岩・頁岩から成る地層中から化石を産出し、中新世中期のものである。尼御前岬に露出する淡緑灰色の凝灰岩層や、加佐ノ岬の海岸ぞいに分布する砂岩・シルト岩層などは、中新世後期のもものとされる。

(5) 中新世の火山性岩石

図幅の東南隅に分布する中新世前期の火山性岩石は、その大部分が火砕岩であり、一部に流紋岩熔岩を伴っている。火砕岩には、細粒及び粗粒の凝灰岩、角礫凝灰岩、軽石凝灰岩などがあり、流紋岩質～石英安山岩質の火山活動によって形成されたものである。これらの一部には、花坂付近の陶石鉱床が胚胎している。

## 主 な 参 考 文 献

- 四十万谷健（1962）：小松市東南部山地の地質について。金沢大学理学部地質学教室卒業論文，No. 52（手記）。
- 粕野義夫（1968）：加賀海岸の地形と地質。日本自然保護協会調査報告，33号，11－31頁。
- 粕野義夫（編著）（1977）：10万分の1石川県地質図及び同説明書。石川県発行，石川県の自然環境，第1分冊「地形・地質」。
- 石川県地盤図編集委員会（1982）：10万分の1石川県地盤図及び同解説書・付図。北陸経済調査会調査研究報告，第66号。
- 建設省北陸地方建設局北陸技術事務所（監修）（1982）：石川県平野部の地盤図集。（社）北陸建設弘済会発行。

〔粕野義夫〕

## Ⅲ 土 壤 図

### 1 農 地

#### (1) 農地土壌の概要

この地域は、石川県の南部に位置し、地形的特徴から、手取川扇状地、小松・江沼平野、加賀南部台地、沿岸砂丘及び能美・江沼丘陵に区分できる。以下、地域別に農地土壌の概要を略述する。

手取川扇状地は、手取川の沖積地で、本図幅の根上町中ノ江、寺井町大長野付近から手取川をはさんで北側に広がる地域である。このうち、手取川両岸の排水の悪い地帯には、下層より礫が出現する砂質のグライ土と、壤質のグライ土が分布し、河岸から離れた排水の良い地帯には灰色低地土が分布している。いずれも水田として利用されている。

小松・江沼平野は、梯川流域から加賀市までの柴山潟・木場潟を含む低地で、沿岸州の閉塞によって生じた潟湖の埋積された沖積平野である。農地は、昭和29年から昭和44年にかけて柴山潟及び今江潟（小松市拓栄町付近）の干拓によって造成されたものを含めて、かなり広く分布している。しかし、これらの農地はほとんどが水田で、圃場整備事業により乾田化が進んでいるが、地下水位が高いものが多く、大部分がグライ土である。

加賀南部台地は、本図幅では橋立台地と月津台地とからなっている。橋立台地は、柴山潟の西側の東西に伸びる海拔50m以下の緩波状の洪積台地で、黒ボク土、多湿黒ボク土及び黄色土がそれぞれ点在し、主に樹園（ナシ）または畑として利用されているが、一部は水田としても利用されている。また、月津台地は、柴山潟と木場潟の間に広がる比較的低い洪積台地で、全層または表層に腐植層のある多湿黒ボク土が分布している。この地域は市街化が進み農地は少ないが、畑または水田として利用されている。

沿岸砂丘は、本図幅の上部の手取川河口より海岸線に沿って橋立まで続く砂丘地帯である。この地域は、層位分化のない砂丘未熟土と砂質の灰色

低地土が分布している。砂丘未熟土は畑として野菜が栽培されているが、灰色低地土は水田として利用されている。

能美・江沼丘陵は、本図幅では木場潟の東側の傾斜地で、褐色森林土である。農地は少なく、畑として利用されている。

## (2) 農地土壌の細説

この地域に出現する農地土壌は、7 土壌群、16 土壌統群、27 土壌統に分類できる。土壌統群ごとの出現傾向、土壌特性並びに土地利用について略述する。

土 壤 群	土 壤 統 群	土 壤 統
砂 丘 未 熟 土	砂 丘 未 熟 土	内 灘 統
黒 ボ ク 土	表 層 腐 植 質 黒 ボ ク 土	俵 坂 統
多 湿 黒 ボ ク 土	厚 層 腐 植 質 多 湿 黒 ボ ク 土	来 迎 寺 統
	表 層 腐 植 質 多 湿 黒 ボ ク 土	石 本 統 篠 永 統
褐 色 森 林 土	細 粒 褐 色 森 林 土	尾 猿 内 統
黄 色 土	細 粒 黄 色 土	矢 田 統
	細 粒 黄 色 土, 斑 紋 あり	蓼 沼 統
灰 色 低 地 土	細 粒 灰 色 低 地 土, 灰 色 系	東 和 統 藤 代 統 鴨 島 統
	中 粗 粒 灰 色 低 地 土, 灰 色 系	加 茂 統 豊 中 統
	細 粒 灰 色 低 地 土, 灰 褐 系	諸 橋 統 金 田 統
	中 粗 粒 灰 色 低 地 土, 灰 褐 系	納 倉 統
グ ラ イ 土	細 粒 強 グ ラ イ 土	田 川 統 西 山 統 東 浦 統
	中 粗 粒 強 グ ラ イ 土	芝 井 統 滝 尾 統 琴 浜 統 片 桐 統
	礫 質 強 グ ラ イ 土	蛭 子 統 竜 北 統
	中 粗 粒 グ ラ イ 土	新 山 統
	グ ラ イ 土, 下 層 有 機 質	米 里 統

### イ 砂丘未熟土

これに属する土壌統は、内灘統(Ucn)で、小松空港周辺に分布する。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は風積である。全層砂質で、腐植の集積が少なく、礫層及び酸化沈積物もない。土色は黄褐色を呈している。保肥力、保水力は小で、透水性は大である。生産力は小であるが、有効土層が深く、耕耘も容易であることから、養水分を十分供給されれば、多くの作物の適地となる。畑として、トマト、キュウリ、イチゴ、メロン等が栽培されている。

### ロ 表層腐植質黒ボク土

これに属する土壌統は、俵坂統(Twr)で、橋立台地に点在する。母材は非固結火成岩で、堆積様式は風積である。表層腐植層があるが、礫層はない。土性は強粘質である。土色は、表層が黒褐色で、地表40cm以下が黄色である。斑紋はない。保肥力、保水力は大で、透水性は小である。畑または樹園地として、野菜、ナシが栽培されている。

### ハ 厚層腐植質多湿黒ボク土

これに属する土壌統は、来迎寺統(Rgj)で、月津台地の加賀市高塚町及び小松市島町に小面積分布している。母材は非固結火成岩で、堆積様式は風積である。全層が腐植質で、礫層はない。土性は、表層が粘質で、下層が強粘質である。土色は全層黒褐色を呈し、斑紋がある。保肥力、保水力及び湛水透水性は中～大である。水田として利用されている。

### ニ 表層腐植質多湿黒ボク土

これに属する土壌統は、石本統(Ish)及び篠永統(Shn)で、石本統は梯川上流の小松市長谷町に、篠永統は月津台地に分布している。

石本統は、母材が非固結火成岩で、堆積様式は水積である。表層腐植層があり、礫層が地表40cm以下より出現する有効土層の浅い土壌である。土性は粘質である。土色は黒褐色で、斑紋がある。保肥力、保水力及び湛水透水性は中である。

一方、篠永統は、母材が非固結火成岩で、堆積様式は風積である。表層腐植層はあるが、礫層はない。土性は強粘質である。土色は、表層が黒褐色、下層が黄褐色で、斑紋がある。保肥力、保水力及び湛水透水性は中～大である。両土壤統とも水田として利用されている。

#### ホ 細粒褐色森林土

これに属する土壤統は、尾猿内統(Osa)で、橋立台地の加賀市黒崎と、加賀江沼丘陵に点在している。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は洪積世堆積である。表層腐植層及び礫層はない。土性は強粘質である。土色は黄褐色で、斑紋がない。土壤のち密度は大きい。保肥力及び保水力は大で、湛水透水性は小である。畑として野菜が栽培されている。

#### ヘ 細粒黄色土

これに属する土壤統は、矢田統(Yad)で、橋立台地の末端の加賀市篠原新町に分布する。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は洪積世堆積である。表層腐植層及び礫層はない。土性は強粘質である。土色は黄褐色で、強酸性土壤である。斑紋はない。保肥力、保水力は大で、湛水透水性は小である。畑として野菜が栽培されている。

#### ト 細粒黄色土、斑紋あり

これに属する土壤統は、蓼沼統(Tdn)で、橋立台地、柴山潟の北側の加賀市新保町及び小松市下粟津町近辺に分布している。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は洪積世堆積である。表層腐植層及び礫層はない。土性は全層が強粘質である。土色は黄褐色で、斑紋がある。保肥力及び保水力は大で、湛水透水性は小である。水田として利用されているほか、一部畑として利用されている。

#### チ 細粒灰色低地土、灰色系

これに属する土壤統は、東和統(Tow)、藤代統(Fjs)及び鴨島統(Kmj)で、いずれの土壤統も手取川扇状地の南端の排水良好な地帯に分布している。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は水積である。表層腐



植層及び礫層はない。土性は、東和統が強粘質で、藤代統及び鴨島統が粘質である。土色は灰色で、斑紋があるが、構造は鴨島統のみ認められる。保肥力及び保水力は、東和統が大であるが、藤代統及び鴨島統は中である。また、湛水透水性についてはいずれも中である。主に水田として利用されている。

リ 中粗粒灰色低地土，灰色系

これに属する土壤統は、加茂統 (Km) 及び豊中統 (Toy) で、加茂統は手取川扇状地の南端の小松市荒屋町に、豊中統は沿岸砂丘の北陸自動車道片山津インターチェンジ近辺及び本図幅上端の美川町蓮池町に分布する。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は水積である。表層腐植層及び礫層はない。土性は、加茂統が壤質で、豊中統が砂質である。ただし、豊中統については、基盤整備事業の際に客土を行い、表層が粘質の土壤となっている。土色は灰色で、斑紋がある。保肥力及び保水力は小であるが、湛水透水性は、加茂統が中で、豊中統は大である。水田として利用されている。

ヌ 細粒灰色低地土，灰褐色系

これに属する土壤統は、諸橋統 (Mor) 及び金田統 (Kan) で、諸橋統は梯川流域の小松市漆町に、金田統は手取川扇状地の寺井町東任田に分布する。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は水積である。表層腐植層及び礫層はなく、有効土層は深い。土性は、諸橋統が強粘質で、金田統は粘質である。土色は灰褐色で、斑紋がある。保肥力及び保水力は、諸橋統が大で、金田統は中である。また、湛水透水性は、諸橋統が大であるが、金田統は中である。水田として利用されている。

ル 中粗粒灰色低地土，灰褐色系

これに属する土壤統は、納倉統 (Nok) で、根上町の海岸線に沿って点在する。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は水積である。表層腐植層及び礫層はない。土性は砂質である。土色は灰褐色で、斑紋がある。保

肥力及び保水力は小で、湛水透水性は大である。水田または畑として利用されている。

#### ユ 細粒強グライ土

これに属する土壤統は、田川統 (Tgw)、西山統 (Nsh) 及び東浦統 (Hgs) である。田川統は柴山瀉干拓地、小松市拓栄町の今江瀉干拓地及び小松市打越町に分布している。また、西山統は柴山瀉の北側の一部に、東浦統は本図幅の低地に広く分布している。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は水積である。表層腐植層及び礫層はない。土性は、田川統が強粘質で、西山統及び東浦統が粘質である。土色は青灰色で、斑紋は田川統及び東浦統については地表 30cm 以下に認められる。いずれの土壤統とも、全層または作土層直下よりグライ層があり、地下水位が高く、排水が悪いために根系障害を受け易い。保肥力及び保水力は、田川統及び西山統が大であるが、東浦統は中である。湛水透水性はいずれの土壤統とも小である。水田として利用されている。

#### ワ 中粗粒強グライ土

これに属する土壤統は、芝井統 (Shb)、滝尾統 (Tko)、琴浜統 (Kot) 及び片桐統 (Kat) である。芝井統は小松市末広町に、滝尾統は主に柴山瀉及び今江瀉干拓地周辺に分布している。また、琴浜統は柴山瀉の南西側の加賀市潮津町に、片桐統は手取川扇状地の根上町五間堂町に分布している。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は水積である。表層腐植層及び礫層はない。土性は、芝井統及び滝尾統が壤質で、琴浜統及び片桐統は砂質である。土色は青灰色で、斑紋は滝尾統及び片桐統については地表 30cm 以下にみられる。いずれの土壤統とも、全層または作土層直下にグライ層が出現し、また、排水不良のため根系障害を受け易い。保肥力、保水力は、芝井統及び滝尾統は中、琴浜統と片桐統は小である。また、湛水透水性はいずれの土壤統とも小である。水田として利用されている。

### カ 礫質強グライ土

これに属する土壌統は、蛭子統 (Ebs) 及び竜北統 (Ryu) で、両土壌統とも手取川の河岸に分布している。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は水積である。表層腐植層はないが、礫層については、蛭子統が地表下 30～60 cm から、また、竜北統は 30 cm 以内から出現する。土性は、蛭子統が壤質で、竜北統が砂質である。土色は青灰色で、斑紋は地表下 30 cm 以下にはない。いずれの土壌統とも、全層または作土層直下からグライ層が出現し、排水不良で有効土層が浅い。保肥力、保水力及び湛水透水性はいずれも小である。水田として利用されている。

### ヨ 中粗粒グライ土

これに属する土壌統は、新山統 (Niy) で、手取川の河岸に分布している。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は水積である。表層腐植層及び礫層はない。土性は壤質である。土色は青灰色で、斑紋がある。地表下 30～80 cm 以内からグライ層が出現する。保肥力、保水力及び湛水透水性は中である。水田として利用されている。

### タ グライ土, 下層有機質

これに属する土壌統は、米里統 (Yon) で、小松市北浅井町、吉竹町に分布している。母材は非固結堆積岩で、堆積様式は水積である。表層腐植層及び礫層はないが、地表 65 cm 以下に植物遺体が出現する。土性は強粘質である。土色は、表層が青灰色で、それ以下は黒色であり、斑紋がある。地表 30 cm からグライ層が出現する。保肥力及び保水力は大で、湛水透水性は小である。水田として利用されている。

〔中 屋 滋 夫〕

## 2 林 地

### (1) 林地の概要

この地域は、石川県の南部にあり、大日山系裾野の丘陵地帯で、全般に緩やかな地形である。母材は、新第三紀から第四紀の泥岩、シルト岩、砂

岩、礫岩が主体で、一部に凝灰岩が混じる。土壌は、褐色森林土壌（黄褐色系）がほとんどで、一部に褐色森林土壌が分布し、海岸沿いは砂丘未熟土壌である。林相は、天然性の落葉広葉樹林（2次林）が大部分で、丘陵頂部にはアカマツ、砂丘地にはクロマツの分布も多い。人工造林（スギ）の適地は褐色森林土壌が分布する斜面の下部に限られ、分布面積の割合は全般に少ない。

## (2) 林地土壌細説

この地域の林地に分布する土壌は、土壌断面の色、土性、堆積様式の相違により、5土壌統群、7土壌統に分類された。

土 壌 統 群	土 壌 統
乾 性 褐 色 森 林 土 壌	金 野 1 統 ( K n - 1 )
乾性褐色森林土壌（黄褐色系）	木 場 1 統 ( K b - 1 )
	柴 山 1 統 ( S y - 1 )
	美 岬 1 統 ( M s - 1 )
褐 色 森 林 土 壌	金 野 2 統 ( K n - 2 )
褐色森林土壌（黄褐色系）	木 場 2 統 ( K b - 2 )
砂 丘 未 熟 土 壌	内 灘 統 ( U c n )

### イ 乾性褐色森林土壌

この土壌は山頂、尾根、尾根斜面などの乾燥し易い場所に出現する。本図幅では東南部の丘陵地帯に出現した。

#### 金野1統 ( K n - 1 )

土性は埴質が多く、母材は凝灰岩が主体である。分布域は本図幅東南部の丘陵地帯頂部及び斜面上部である。一般に、土壌は浅く、腐植は乏しい。土壌構造は堅果状構造が発達する。孔隙は少なく、礫を含む場合がある。これに含まれる土壌型は Bc 型及び B<sub>D</sub>(d)型で、柱状断

面図はB<sub>D</sub>(d)型である。林相は天然生の落葉広葉樹林及びアカマツ林が多く、生産力は低い。

ロ 乾性褐色森林土壌（黄褐色系）

この土壌は山頂、尾根、尾根斜面などの乾燥し易い場所に出現する。なだらかな丘陵地帯が多い本図幅では広い面積に出現した。

a 木場1統（Kb-1）

土性は微砂質が多く、母材は新第三紀から第四紀の泥岩、シルト岩、砂岩、礫岩が主体である。分布域は本図幅の東部に広がる丘陵地帯の頂部及び凸斜面で、分布面積は広い。腐植は乏しく、土壌構造は堅果状構造がよく発達する。孔隙は少なく、円礫を含む場合が多い。これに含まれる土壌型はB<sub>c</sub>型及びB<sub>D</sub>(d)型残積土で、柱状断面図はB<sub>D</sub>(d)型である。林相は天然生の落葉広葉樹林及びアカマツ林が多く、生産力は低い。

b 柴山1統（Sy-1）

土性は砂質で、母材は第四紀の砂岩が主体である。分布は海岸に近いなだらかな丘陵地帯である。腐植は乏しく、土壌構造は発達しない。これに含まれる土壌型はB<sub>c</sub>型及びB<sub>D</sub>(d)型で、柱状断面図はB<sub>D</sub>(d)型である。林相は天然生の落葉広葉樹林及びアカマツ林が多く、生産力は極めて低い。

c 美岬1統（Ms-1）

土性は埴質で、母材は新第三紀から第四紀の泥岩、シルト岩が主体である。分布は海岸に近いなだらかな丘陵地帯である。腐植は乏しく、土壌構造は堅果状構造がよく発達する。これに含まれる土壌型はB<sub>c</sub>型及びB<sub>D</sub>(d)型で、柱状断面図はB<sub>D</sub>(d)型である。林相は天然生の落葉広葉樹林及びアカマツ、クロマツ林が多く、生産力は極めて低い。

ハ 褐色森林土壌

この土壌は斜面下部に出現する。本図幅では丘陵地帯の谷筋に出現し

た。

#### 金野 2 統 (Kn - 2)

土性及び母材は金野 1 統と同一である。分布地域も金野 1 統と同一であるが、丘陵地帯の斜面下部にのみ出現した。腐植の浸透はよく、土壤構造は団粒状で、孔隙があり、谷斜面の崩積土には石礫を多く含む。これに含まれる土壤型は B<sub>D</sub> 型である。林相はスギ人工林が多く、生産力は高い。スギ造林の適地である。

#### ニ 褐色森林土壤 (黄褐系)

この土壤は谷筋などの凹地や斜面下部に出現する。本図幅では丘陵地帯の谷筋に出現した。

#### 木場 2 統 (Kb - 2)

土性及び母材は木場 1 統と同一である。分布地域も木場 1 統と同一であるが、丘陵地帯の谷筋や斜面下部にのみ出現し、分布面積は狭い。腐植の浸透はよく、土壤構造は、団粒状であるが、やや堅い。孔隙があり、円礫を含む場合が多い。これに含まれる土壤型は B<sub>D</sub>(d) 型及び B<sub>D</sub> 型で、柱状断面図は B<sub>D</sub> 型である。林相はスギ人工林及び天然生の落葉広葉樹林で、生産力はあまり高くないが、スギ造林は可能である。

#### ホ 砂丘未熟土壤 (Ucn)

土質は全て砂で、砂丘地全域に分布している。腐植はほとんどなく、保水力も小さい。クロマツ、ニセアカシアの飛砂防止林が造成されている。

[ 千 木 容 ]

## IV 土地利用現況図

### 1 農 地

地域内市町における農地の特徴は、耕地率が約19.1%、水田率が約91.4%とそれぞれ県全体の率約13.2%、約81.6%を上回っていることが挙げられ、その概要については表Ⅵ-1のとおりである。

この率にみるとおり、当地域は開発が進んでおり、図幅内地域についてはその度合いが一層強く、平野部が大部分を占め、その中で耕地の占める割合は特に高い。水田は市街地等を除く平野部の殆んどであり、畑はその中に点在している。果樹園については加賀市、小松市の一部に小面積でみられ、なし、ぶどう等が栽培されている。また、柴山潟や今江潟の干拓地も水田として利用されている。

### 2 林 地

当地域内市町の森林率は約58.0%で県全体の約68.2%よりも低く、小松市、加賀市の山地部を除けば、平野部が殆んどであり、地形も穏やかである。当該図幅内についても、図幅東南部の丘陵部で100m程度の標高が認められるほかは、低平な丘陵地や台地が海岸部、加賀市の一部にみられるだけである。また、当図幅内地域は開発がよく進んでおり、ゴルフ場、空港、公園等に利用されているほか、スギ等の人工造林地も分布する。

植生的にみると、海岸線の砂丘地帯でクロマツ林を主とした針葉樹等が植林されており、加賀市、小松市の丘陵地、台地ではスギなどの針葉樹の造林地がみられる。また、図幅東南部の丘陵部は、天然生広葉樹のコナラと人工生針葉樹のアカマツ等が混じて大部分を占めており、竹林もこの山地部の隣接地域に点在してみられる。

〔山 本 朗〕

表VI-1 農地の概要

(単位: ha)

区分 市町名	耕地面積	田	畑			
			計	普通畑	樹園地	牧草地
小松市	4,640	4,210	433	340	89	4
加賀市	3,800	3,350	442	233	186	23
根上町	686	656	30	29	1	-
寺井町	674	662	12	12	-	-
川北町	876	863	13	5	8	-
美川町	362	352	10	10	0	-
計	11,038	10,093	940	629	284	27
県計	55,500	45,300	10,200	5,830	3,150	1,230

資料：昭和57～58年「石川農林水産統計年報」による。

(注) 面積はラウンドされた数値を使用しているため、各数値の積上げ値と合計とが一致しない場合がある。



表 VI-2 林地 の 概 要

(単位: ha)

区分 市町名	総森林 面積		林 野 面 積						人工林 (%)	
			人工林		天然林		竹	その他		
			針葉樹	広葉樹	針葉樹	広葉樹				
										針葉樹
小松市	26,371	6,919	5,219	91	1,323	19,061	62	615	5,310	20.1
加賀市	107	83	2,293	81	855	3,478	57	155	2,374	34.3
根上町	83	—	95	—	2	3	—	7	95	88.8
寺井町	—	—	4	—	29	48	1	1	4	4.8
川北町	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
美川町	55	—	36	5	—	—	—	14	41	74.5
計	33,535	—	7,647	177	2,209	22,590	120	792	7,824	23.3
県 計	282,692	—	80,923	2,081	21,039	166,520	2,233	9,896	83,004	29.4

資料：昭和57～58年「石川農林水産統計年報」による。

なお、この調査は昭和59年度現在における資料の収集、現地調査等をもって調整、作成したものである。

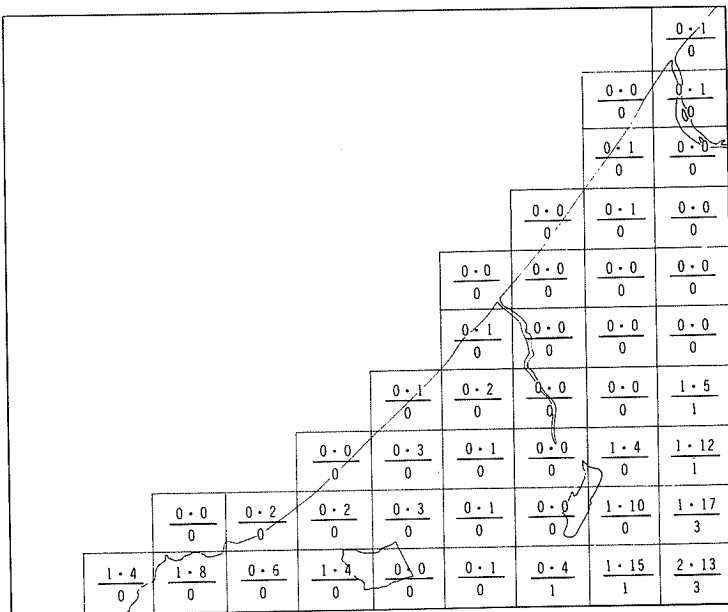
〔参 考〕

「小松」図幅内における起伏量・谷密度図

起伏量は、国土地理院発行、縮尺5万分の1地形図（一色刷実測図）各辺を10等分して得る各方眼内の最高点と最低点との標高差を示し、図中では、下記階級区分(10ヶ)を行ない、その階級値で表わしている。谷密度は、上記方眼の各辺をきる谷の数の総和を示す。方眼内の数値は下記のように表わしている。

起伏量階級・谷密度  
最低点(実数値×1/10)

階級	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
起伏量 (m)	0 50 未満	50 100 "	100 150 "	150 200 "	200 300 "	300 400 "	400 600 "	600 800 "	800 1,000 "	1,000 以上



(資料：土地分類図(石川県))

企画・編集機関 経済企画庁  
 調査機関 石川県  
 調査および作図 山一雄(金沢大学)  
 小島和夫(金沢向陽高校)  
 調査実施年度 昭和46・47年度

縮尺20万分の1,  
 経済企画庁総合開発局,  
 昭和49年)

1986年2月 印刷発行

土地分類基本調査

小 松

編集発行 石川県農林水産部耕地整備課  
金沢市広坂2丁目1番1号

印刷 北日本測量株式会社  
金沢市浅野本町2丁目2番5号